

図版解題

図版一より八までは、当時まだ「鶴岡山八幡宮寺」というのが正式な名称であった鎌倉の鶴岡八幡宮を、イタリア生まれのイギリス人写真家フェリックス・ベアト（一八二五―没年不詳）が、来日翌年の元治元年（二八六四）に撮影した幕末古写真である。

これらの写真には、神仏分離政策で明治三年（一八七〇）に惜しくもとりこわされてしまう徳川秀忠（一五七九―一六三二）建立の多宝大塔、薬師堂、護摩堂、輪藏、鐘楼、仁王門といった江戸時代初期を代表する重厚な建造物をはじめ、上宮の六角納経堂や大正十二年（一九二三）の関東大震災で倒壊する同じく上宮の楼門、そして下宮の神楽所等々が写っており、いまとなつてはまことに貴重な歴史資料といわねばならないものである。

一〇八の図版のうち最後の八を除く七枚は、すべて横浜開港資料館の所蔵で、昭和六十二年（一九八七）同館編集発行の『F・ベアト幕末日本写真集』より転載させていただいた。図版八は平成十五年（二〇〇三）に安城市本證寺林松院文庫蔵となった新出資料であるが、これと同じ古写真がイギリスのピーボディ・エセックス博物館にも蔵されている。

なお、図版五と六の神楽所、図版七と八の多宝大塔は、同じ建造物でありながら明らかに撮影の時期を異にしている点が大いに注目される。

図版九は鶴岡八幡宮現有の境内絵図である。紙本着色でタテ一四二・〇センチ、ヨコ一〇九・五センチ。右下方に「享保十七壬子年之図」とあるところより、その制作年代は一七三二年と判明する。八幡宮は文政四年（一八二二）に絵図上方の上宮一帯が全焼し、その後まもなく現在の社殿が再建されたから、本図はそれ以前の秀忠による全面造替の景観を描く重要資料で、ことに各建造物の桁行・梁間の寸法が詳細に記入されているのは、史料的にも価値高いものがあるといわなければならない。図版九は八幡宮発行の図録から掲載させていただいた。

図版一 石段の途中に座っているひげをたくわえた外国人が、図版三・五・八にも登場することに注意。



神楽所

楼門

回廊

若宮社

図版二

図版一の石段を登りつめたところにある楼門と回廊を西側からみたところ。回廊の一室から顔を出している僧と図版三・八の僧は、おそらく同一人物であらう。



回廊

楼門

六角堂

図版三

中央に立つ僧が図版二・八の僧と、また神楽所の石段に腰をおろすひげの外国人が、図版一・五・八に写っている外国人とそれぞれ同一人物とおもわれる。



神楽所

若宮社

図版四

護摩堂に足場が掛けられていることに注目したい。
神楽所の縁に置かれているきやたつが、図版五にも写っている。



護摩堂

輪 蔵

神楽所

図版五

神楽所のはしごときやたつが、図版三・四にも写っており、北東角にいる
ひげの外国人が図版一・三・八の外国人と同じであることも注意したい。



輪 蔵

神楽所

図版六 部戸の開閉、扁額・はしご・床几の有無などより、図版五とは明らかに撮影の時期を異にする。



輪 蔵

神楽所

図版八と比較して、塔の相輪・宝鎖・降棟がなく、仁王門・鐘楼も失われているなど、図版七と八は明瞭に撮影時期が違っている。



薬師堂

多宝大塔

仁王門跡



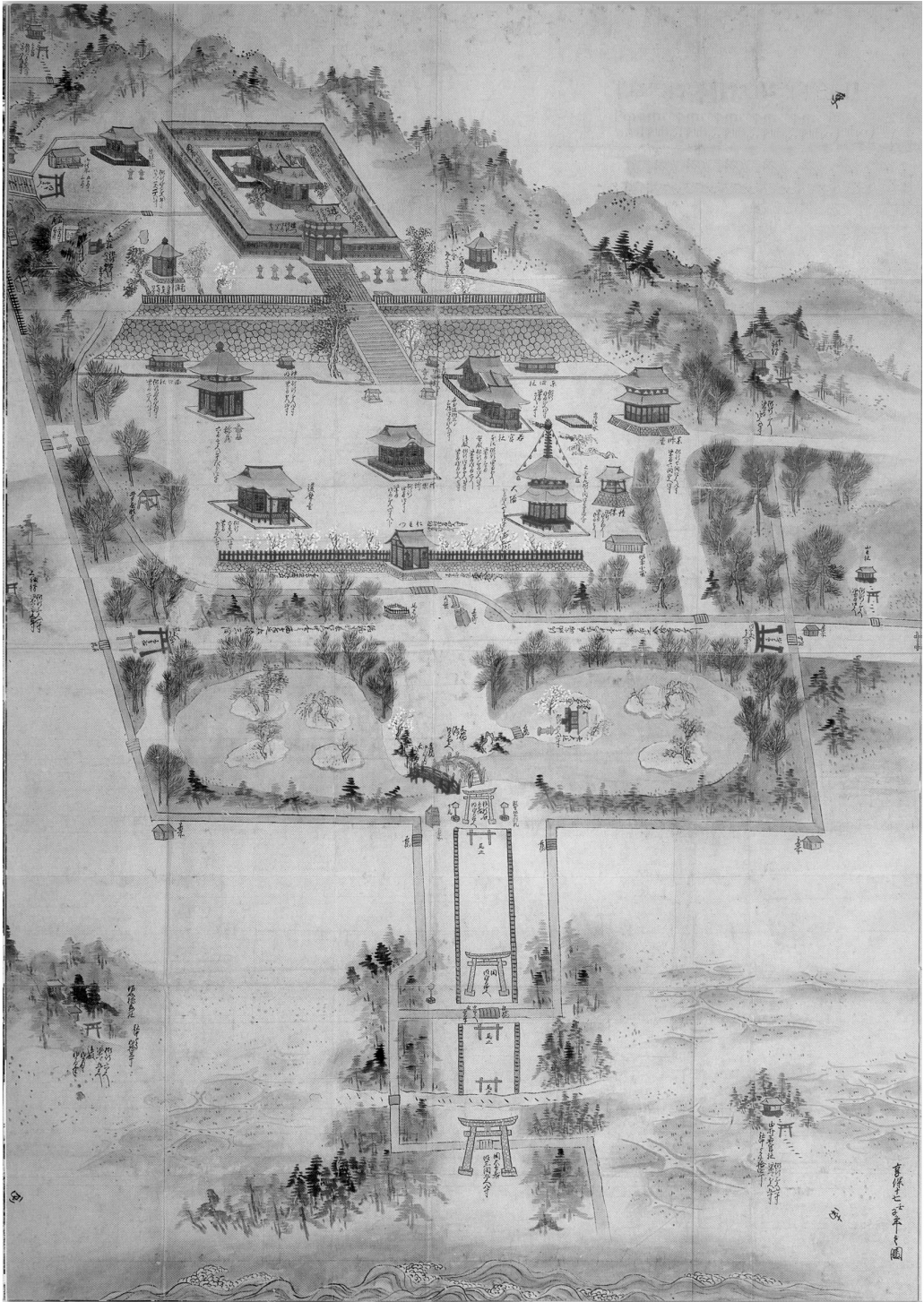
薬師堂

多宝大塔

鐘 楼

仁王門

一七 図版八 写っている僧と外国人から判断して、この写真は図版一・二・三・四・五と同時期に撮影されたものであろう。図版七と異なり仁王門・鐘楼が存在している事実にも注目する必要がある。



図版九 鶴岡八幡宮は草創以来なんども造宮をくりかえしてきたが、江戸幕府第二代將軍徳川秀忠による全面的造替は、まったく面目を一新する画期的なものであった。図版九はその秀忠造立の景観を享保十七年（一七三三）に描写した詳細な境内絵図で、ベアトの幕末写真ともよく合致する。

鶴岡八幡宮の幕末古写真

— F・ベアトのアルバムより —

キーワード… 鶴岡八幡宮・多宝大塔・神仏分離・F・ベアト

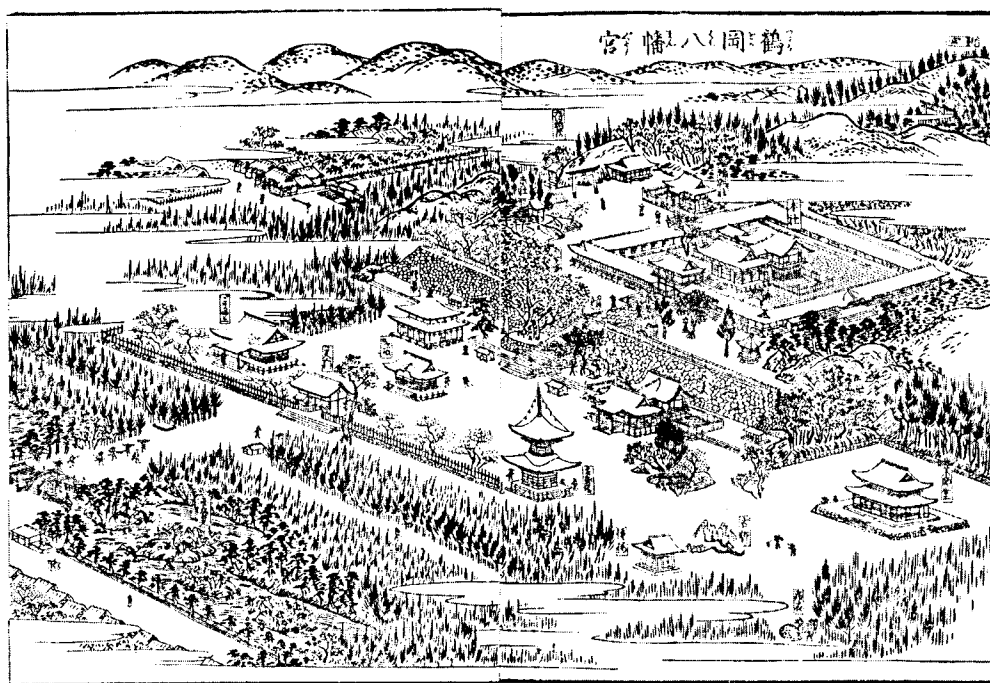
小山 正文

—

鎌倉は十二世紀後半から十四世紀前半までのおよそ百五十年間にわたり、武家政権最初の幕府が置かれていた政治の中心地としてあまりにも有名である。その鎌倉の中心に鎮座し幕府とも密接な関係をもつて社運隆盛したのが、ここにとりあげようとするこれまた著名な鶴岡八幡宮（明治までは鶴岡山八幡宮寺といった。以下八幡宮と略記する）にほかならない^註。社伝によれば八幡宮は康平六年（一〇六三）八月、前後十二年合戦で安倍頼時（生年不詳—一〇五七）・貞任（二〇一九—一六二二）・宗任（生没年不詳）父子の反乱を鎮定した源頼義（九八八—一〇七五）が、山城国の石清水八幡宮を由比郷鶴岡に勧請したのがはじまりという。その

後治承四年（一一八〇）十月、鎌倉に入つた頼義五代の孫頼朝（一一四七—九九）が、これを現在地の小林郷北山へ遷座し鶴岡若宮と称するようになったのが八幡宮の起源で、爾来同宮は源氏の守護神として幕府の尊崇と庇護をうけ大いに繁栄したことは、人のよく知るところとなっている。元弘三年（一一三三）の鎌倉幕府滅亡後も八幡宮は、やはり源氏の流れをくむ足利氏をはじめ後北条氏綱（一四八六—一五四一）、豊臣秀吉（一五三六—九八）、徳川家康（一五四二—一六二六）など室町・戦国時代を代表する諸武将が保護の手を加え、戦乱で失われた社殿の復興や造営の計画がはかられたが、わけても家康の遺命をうけて江戸幕府第二代將軍徳川秀忠（一五七九—一六三二）が、元和八年（一六二二）から寛永三年（一六二六）にかけて行なつた八幡宮上下両宮全体におよぶ大々

的な造替は、面目をまったく一新する画期的なものであった^{註2}。この秀忠によるかつてない壮大な八幡宮の全貌は、享保十七年（一七三二）の鶴岡八幡宮境内図（図版九）^{註3}や寛政九年（一七九七）刊の『東海道名所図会』（挿図）などからも十分しのぶことができるところとなっている。かくて鎌倉に聳立した壮麗な八幡宮も、しかし二百年後の文政四年（一八二二）十一月十七日の火災で上宮を全焼し、それより半世紀を出ない明治維新の神仏分離政策で、下宮一帯に展開していた仏教関係の堂塔がごとごとくとりこわされるという運命にあった。もともと上宮は焼失後ただちに幕府の直轄事業として今みる本殿、幣殿、拝殿、楼門、回廊などが文政十一年（一八二八）までに再建され、また下宮の若宮社と神楽所（下拝殿、舞殿とも）は仏教建築でなかったために撤去をまぬがれたが、神楽所は上宮の楼門と共にその後大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災で倒壊したから、今は若宮社のみが秀忠時代唯一の建造物となってしまったのである。秀忠によるこの八幡宮の神仏渾然一体となった造営は、まさに江戸幕府第三代將軍徳川家光（一六〇四―一五二）のあの日光東照宮の前駆ともいわれるものであっただけに、仏教関係の建造物が明治になってからすべて失われたのは、かえすがえすも残念というほかない。ここで秀忠造営の八幡宮につき専門家の立場から関口欣也氏が、次のごとく簡潔にまとめておられるので引用させていただき^{註4}、もって往年の偉観をしのぶようがとしたい。



寛政九年（一七九七）の『東海道名所図会』に描かれた鶴岡八幡宮

家康は鶴岡八幡宮全体の造替を意図したというが、果たさずして没したため、二代將軍秀忠は元和八年（一六二二）に造営を命じ、寛永元年（一六二四）十一月十五日に上下両宮の正遷宮が行われ、同三年までに諸堂末社神輿まで造り終わつた（鶴岡八幡宮創建并將軍家御造営等々記）。寛永元年正遷宮は慶長九年（一六〇四）再興より二十一年目で、大社の式年造替と同じ、大工は幕府御大工遠江守藤原長次であつた（鶴岡八幡宮棟札銘）。なお『本光國師日記』の寛永五年七月四日条に、鈴木長次が八脚門・上宮・下宮の額字彫様を問い合わせた旨がみえ、同年八月一日に幕府は「鶴岡社中法度十一ヶ条」を制定した（鶴岡八幡宮雜故記録写）。

この寛永造営は現存の若宮社殿・享保十七年（一七三二）境内絵図、各堂社の図面より明らかのように、規模一新の全面造替であつた。すなわち上下両宮とも本殿の流造形式は変わらないが、上宮本殿を九間社、下宮本殿を五間社に（天正指図はともに三間社）、石清水式の幣殿・拝殿を権現造に、同じく石清水式の上宮楼門を大形の三間楼門に改めた。上宮回廊の東西間口は旧規だが、社殿を権現造にしたため、南北奥行を拡大した。なお、上宮の回廊で囲まれた内側の地盤は中世と同様に高く、これより回廊の地盤が低かつたから、中央の社殿は現状より一層壯観であつた。

目をみはるのは下宮一帯の変化である。八脚門（切妻・三棟造）を入ると、中央に三間神樂所（入母屋・出組）、その前側東西に五間多宝塔

（四手先）と五間護摩堂（入母屋・出組）、後側東西に権現造若宮社殿（出組）と五間経蔵（宝形・裳階付、詰組三手先）、若宮の東方に五間薬師堂（入母屋・裳階付、四手先）がたち、上宮には前面東西に六角納経堂と三間愛染堂（ともに宝形）、西北に三間入母屋社殿の白旗社（出組）と五間御供所（舟肘木）がたつ（以上、図面集成写による）。

このように下宮一帯は、回廊に囲まれた優雅な平安風の社頭と一変し、神樂所を焦点に外観・高低・塊量の異なる建築が群立し、力強い動的な壯観となつた。すなわち、鶴岡八幡宮寛永造替は旧規に拘泥しない桃山大造営の典型であつた。各建築は主として和様（経蔵は禅宗様）の本格的な構造細部を具備し、丹塗が施され、上下両宮社殿が檜皮葺、他が上等の桐葺であつた。

二

明治の神仏分離で上下両宮に存在していた仏堂、仏塔、仏像、仏具、仏典の類が全部とりはらわれ、様相が一変してしまふ八幡宮に關し、せめてものなぐさめは、それが断行される直前にひとりの外国人が八幡宮の境内を写真におさめておいてくれたことである。その外国人の名はイタリア生まれのイギリス人写真家 フェリックス・ベアト Felix Beato（一八二五―没年不詳）という人で、かれが撮影した八幡宮の写真に失われた仁王門、多宝大塔、

薬師堂、護摩堂、輪蔵、鐘樓、六角堂などが偶然写っているのである(図版)。もっともこれらのうち多宝大塔だけが全景写真で、その他は一部分だけしかおさまっていないが、それでも写真であるから江戸時代の絵図などよりは遥かに正確かつ具体的で実感があり、いまとなつてはかけがえのない実に貴重な資料といわなければならないものである。

撮影者のベアトについては、かならずしも明らかでない部分が多いが、目下知られる足跡は以下のようなものである^{註5}。その生年は一八二五年(文政八)で、イタリアのベネチア生まれであつた。間もなく当時イギリス領であつた地中海のマルタ島に移住し、兄のアントニオと共に写真家を志す。一八五〇年(嘉永三)ころ妹マリアの夫でやはり写真家のロバートソンが、コンスタンチノープル(イスタンブール)の帝国造幣局首席彫版師に任命されたのを機にベアトも同行しトルコへ移る。一八五五年(安政二)九月義弟のロバートソンと共にクリミア戦争に従軍。翌年ロンドンで戦争取材写真展を開催し成功をおさめる。このころイギリスの国籍を取得した模様。その後ロバートソンとアテネ、エジプト、パレスチナの撮影旅行をする。一八五七年(安政四年)インドのカルカッタにスタジオをもつた義弟と兄アントニオに同行しインドへ渡る。翌年イギリス陸軍省の委嘱をうけてセポイの反乱を取材撮影し、報道写真家としての地位を確立する。一八六〇年(万延元)中国へ渡りイギリス、フランス軍に随つてアロー戦争を取材する。中国で『絵入りロンドン・ニュース』の特派画家兼通信員であつたワーグマンを知る。一八六三年(文久

三) 春ころ来日し、ワーグマンと組んで横浜居留地二十四番でスタジオ「ベアト・アンド・ワーグマン」を開設する。翌年(元治元)八月イギリス、アメリカ、フランス、オランダの連合艦隊による下関砲撃を写真取材。十一月ワーグマンらと鎌倉の撮影旅行をした際、イギリス第二大隊第二十連隊のジョージ・ウォールター・ポールドウィン少佐、ロバート・ニコラス・パート中尉と江の島で朝食を共にした直後、右二人の士官が日本人によつて殺害される鎌倉事件が起きる。一八六七年(慶応三)オランダ公使ポルスブルックと富士登山を行ない写真撮影をする。このころワーグマンとのパートナースhipを解消。一八六八年(明治元)イギリス軍兵站将校ジェイムス・ウィリアム・マレーの解説付アルバム『日本の風景』を発売。翌年横浜の海岸通り十七番に写真館を開き自立の道を歩む。一八七一年(明治四)アメリカ海兵隊の朝鮮出兵に従軍し報道写真を撮る。一八七七年(明治十)一月ステイルフリード・アンド・アンデルセンに写真館の一切合切を譲渡し、一八八四年(明治十七)十一月二十九日離日する。離日の理由は米相場の失敗だつたといわれている。この年イギリスのスーダン遠征軍に随行し報道写真取材する。一八八六年(明治十九)イギリスに帰国しロンドン地区写真協会で講演を行なう。一九〇四年(明治三十七)ころビルマのラングーンとマンダレーで家具工場を経営していたらしいが、その後の消息は不明。したがつてベアトの没年、没齡、死没地なども詳らかではないが、八十歳を越す高齡で亡くなつたものとおもわれる。

このような経歴をもつベアトが、文久三年（一八六三）の来日から明治十七年（一八八四）の離日までの二十年間に撮影した日本各地の素朴で美しい風景、風俗、風物、風習等々の古写真は、現在二四〇点前後も確認されており、さいわいそれらは横浜開港資料館発行の『F・ベアト幕末日本写真集』（以下『写真集』と略す）にすべて収められている¹⁵。

実はこの『写真集』の番号42から48までの七枚の写真は、二度と再び撮ることのできない神仏分離以前の八幡宮の姿をいまに伝えるまことに重要な歴史的資料となっているのである。よってここにそれらをあらためとりあげ（図版）¹⁶、ありし日の八幡宮をしのびつつ若干の問題点にふれてみたいとおもう。

三

図版一は神楽所（神楽殿、下拝殿、舞殿とも）の東側から上宮の楼門、回廊を仰ぎみた写真である。石段の左手には鎌倉幕府第三代將軍で、『金槐和歌集』の著者として知られる頼朝の二男実朝（一一九二—一二一九）が右大臣拝賀の際、おいの若宮別当公暁（一二〇〇—一九）によって殺される夜、石段を降りてくる実朝を木陰で待っていたと伝える「公暁隠れの大銀杏」も写っているのがわかる。この景観は現在もあまり変わっていないように見うけられようが、すでに記したごとく楼門と神楽所は関

東大震災で倒壊後、昭和五年（一九三〇）に復旧された建物となっているから、ベアトの時代とは違うことを知っておく必要がある。なお石段の途中に二人の外国人が腰をおろしているのも、他の図版とも関連してくる事象として留意しておかなければならない。

図版二は図版一の石段六十二段を登りきったところにある楼門、回廊を西側から眺めたものである。楼門は正面三間、側面二間で中央に扉一戸を開くいわゆる三間一戸で、石基壇上に立ち、上層のある二重門すなわち楼門であるが、屋根は上層のみで入母屋造り銅板葺きの二重繁垂木となっている。円柱、和様三手先、中備は撥束。上層に勾欄をめぐらし、中央上部に曼殊院入道二品親王良恕（一五七四—一六四三）の筆になる「八幡宮寺」の額が上つていた¹⁷。秀忠建立の楼門は文政四年に焼失後、同十一年に写真のものが再建されたが、関東大震災で前面に倒壊した。昭和五年に旧材を用いいまみる楼門を再興したので、重文には指定されていない。回廊もやはり銅板葺で、門向って右の一間からひとりの社僧が顔を出しているところからもわかる通り、内部は床をはった間仕切のある部屋となっていて、外側に蒔戸をつり勾欄を設ける。なお回廊正面の両端は千鳥破風で変化付けがなされている。この回廊は中の本殿、幣殿、拝殿と共に重文の指定をうける。図版二で見逃せないのは、回廊の東側に宝形造りの六角堂が写っていることである。この堂も文政の再建にかかるもので¹⁸、納経堂とも呼ばれていたが、やはり神仏分離の際と

りこわされて今はない。納経堂の別称からもわかるように、この堂は六

十六部回国聖たちが『法華經』、『浄土三部經』、『般若心經』などを写經して、小型の金屬製經筒におさめこれを奉納したところであつたことが、『新編鎌倉志』の記述からも知られる^{註10}。こうした納經堂は全国各地の靈仏、靈社、靈地、靈山に必ずといってよいほど存在していた中世以来の伝統的な仏堂のひとつであつて、参詣曼陀羅や寺境絵図にもよくみるものであるが、現在ではすっかり姿を消し、この写真などはそれを具体的に示す実に貴重な資料といえる。ちなみに六角納經堂の本尊は聖觀音像と記録されているが^{註11}、分離後その像はどうなったのか明らかでない。この六角堂と樓門をはさんで対称の位置にやはり宝形造り三間四方の愛染堂が、かつてあつたのであるけれども残念ながらベアトの写真には写っていない。愛染堂も六角堂と同様文政の再建になるものであつたが、分離政策で両堂は真つ先にとりこわしの対象となり姿を消した。ただし本尊の愛染明王坐像は、いったん寿福寺におさめられたのち、東京都あきる野市の普門院塔頭新開院に安置され、そこよりさらに小泉策太郎氏、原富太郎氏の手を経て、現在は東京都世田谷区の五島美術館の所有となつて重文の指定をうける^{註12}。像高一・五・五センチ、台座高八九・〇センチのみるからに優秀な鎌倉時代の堂堂たる作品であるが、この愛染明王坐像につきすこし気があることがある。それは新旧両版『神仏分離史料』に掲載の「鶴岡八幡宮旧愛染堂愛染明王像小泉策太郎氏所蔵」とある口絵写真と、たとえば『日本の美術』三七六の五島美術館蔵愛染明王坐像とを比較するに頭部の獅子、条帛、胸飾、臂釧、腕釧、持物、膝頭

の模様、光背、蓮弁の模様、台座のつくりに至るまで、どうも似て非なるところがあるようにおもえてならないことである。ことによるとそれは像が小泉氏から五島美術館へ移つたのち、文化財修理を受け復原された結果なのかも知れないし、また『神仏分離史料』が誤つて別の像を掲載している可能性もあり、識者の示教をえたいと願うものである（補記参照）。

図版三はいまも現存する秀忠建立当初唯一の建造物である若宮社を南西方向からみたもの。若宮社は八幡造りと権現造りを合わせたような檜皮葺き和様の神社建築で、本社（殿）は享保十七年の境内絵図によれば桁行四間二尺、梁間三間の五間社流造りで、これに桁行三間四尺四寸、梁間二間六尺の幣殿、そして桁行四間三尺五寸、梁間二間三尺七寸の入母屋造り向拝付きの拝殿が備わる。この若宮社本社（殿）下陣の透彫りを施した大形の手狭や内外壁面の所狭しとばかりに唐草模様の裝飾が極彩色で描かれているところなどは、よく江戸時代初期の風を示しており、文政四年に焼失したこれと同形式で、さらに規模の大きかつた秀忠造立の上宮本社、幣殿、拝殿もかくやと想像させるみごとな建造物である。なお図版三の僧を中にしての三人の人物と、神楽所の石段で休む三人の外国人をここでも注意しておきたいとおもう。

図版四。これは上宮への石段を登る西方にあつた輪藏すなわち経蔵を、神楽所の正面あたりから斜めにみて撮影した写真である。輪藏は裳階付きであるため外観は二重で、正側面とも各五間の宝形造りとなっている。

境内絵図にはその実寸を六間七尺三寸二分四方と記す。正面三間棧唐戸、両脇各一間花頭窓。側面中央棧唐戸、両脇各二間花頭窓であつたことが写真よりわかるが、背面は不明である。柱は円柱で、抖拱は肘木の端を円弧とする詰組。上層部も詰組三手先で垂木は扇垂木となつていて、上下層とも立派な木鼻がつく。このような建築的諸特徴より本経蔵が、八幡宮において唯一禪宗様であつたことが知られて興味深い。なおはつきりとはわからないが、上下層の抖拱間には絵模様らしきものが描かれているのも注目されよう。屋根は下宮にあつた他の仏教建造物と同様栩葺で、頂上には三狭間の露盤、伏鉢、請花、擦、宝珠をのせるが、全体に背高であり形姿のよいものとはいえない。材質は金属製か。輪蔵の名からも推察される通り、本経蔵の内部中央には多分八角形をした幾段かの引出し式の収納箱があり、その中に『千字文』順に経典がおさめられ、その八角形収納箱全体が心棒で回転するようになっていたのである。

ちなみに経典のほうは神仏分離の際、尼僧峻海貞運の手を経て明治四年（一八七二）に浅草観音浅草寺へ移され、残りは焼却処分されたという^註。現在浅草寺には「鶴岳八幡宮」の印記をみる折本装の元普寧寺版一切経五四二八卷（一部に和版と補写経を交える）を蔵し重文指定となっている^註。経蔵内には四天王像が安置されていてこれも同じく浅草寺へ移安されたが、昭和二十年（一九四五）の空襲で惜しくも焼失した。

図版四において今ひとつ注目されることは、輪蔵の南にあつた護摩堂屋根の北西先端部が写っていて、同堂には足場がかけられている事実で

ある。境内絵図によれば護摩堂は、桁行六間四尺四寸、梁間五間二尺三寸とあり、入母屋造りの向拝付で、回り縁がめぐられる五間に四間の堂であつた。建築様式は他堂と同じく和様で、抖拱は出組（一手先）。屋根はやはり栩葺であつた。内部には五大明王像が安置されていたので五大堂ともいわれたが^註、像についてのその後の記録がないところをみると堂もろとも失われたのであろうか。ベアトが撮影したとき、この堂に足場がかつていたということは、当時それが修理中であつたことを意味するのも知れないけれども、『鶴岡八幡宮年表』を見てもそれらしき記事は見当たらないので^註、護摩堂の足場については何か別の理由を考えてみる必要もあり、のちほどあらためて触れてみたいとおもう。

図版五は下宮の中央に位置していた神楽所の全景で、ここより上宮を拝するところより下拝殿ともいわれ、また神楽舞を奉納する場所でもあるため舞殿とも呼ばれる建物である。境内絵図には桁行四間四寸、梁間二間三尺六寸八分とあり、正背面三間、両側面二間の入母屋造り和様建築で、栩葺き屋根の正背面は軒唐破風となつている。垂木は二重繁垂木で、中備は裾広がりの撥束である。正側面の円柱間にはすべて葎戸をつり、回り縁をめぐらして、正背面に石段を設けるなど全体に古風な趣きがあり、いかにも神楽所にふさわしい建造物といえよう。なおこの写真にも図版一や三でみたと同じ外国人が、神楽所北東角の縁に肘をついて建物の東面をながめているのが写っており、これら三枚の撮影時期が同日であつたことを暗示する点で忽諸にできないものがある。

神樂所は若宮社と共に秀忠建立当初の建造物であったが、あの関東大震災で惜しくも倒壊し、現在は銅板葺き吹放ちの薮戸もない昭和五年の建築に変わっている。

図版六も図版五と同様神樂所であるが、よくみるとその撮影された日や時間帯が異なっているように注意したい。その事実がわかる諸点をあげるならば、第一に屋根の椀材が、図版五ではさほどでもないのに、図版六ではかなり傷んでいる。第二に正面に掲げられている数枚の扁額が、図版五にはあつて図版六にはみられない。第三に正面中央の薮戸が図版五では閉じられているのに図版六では開いている。第四に図版五や図版三の神樂所にかけているはしがが、図版六でははずされており、そのはしががたてかけられていた位置に四角の穴をうがつた大きな礎石らしきものがある。第五に図版五にはない床几のような台が東側の縁に添っていくつか置かれている。第六に登場人物の人数も顔ぶれも両者ではまったく違う。第七に図版五の太陽光線は神樂所の東面を照しているのに対し、図版六では南面で、前者は午前、後者は午後の撮影であつたと判断される。こうしたこともより、図版五と図版六は同じ神樂所でありながら、撮影の日時を異にしていることは確実で、したがつてベアトはすくなくとも二度にわたり八幡宮を撮影したのは疑いなくところといえよう。その時期がいつといつであつたのかについては、のちほどまた触れるであらう。

図版七はベアトが残してくれた八幡宮の写真のなかでも、もつとも重

要な一枚といわなければならないものである。すなわちこれは八幡宮の下宮に明治維新まで厳然と存在していた多宝大塔と、その北東方向にあつた八幡宮の本地仏薬師如来を安置する薬師堂の幕末古写真で、両者は共に徳川秀忠の建立になる高質度の建造物であつた^註。四方三間の多宝塔ならば慶長末年以前のものだけでも四十二基が現存するが^註、四方五間の多宝大塔となると文明十二年（一四八〇）から天文十六年（一五四七）までかかつて建立された根来寺と、天保五年（一八三四）の高野山金剛峯寺西塔のわずかに二基が^註、江戸時代以前のそれとして知られるばかりであるから、八幡宮の多宝大塔が明治に入つてからとりこわされてしまつたことは、まことに惜しくかえすがえすも残念でならない。

ありし日の八幡宮大塔は、塔の前で拝礼をとげる人たちの背丈から推し測つてもわかる通り、高さ優に六尺はあるうかとおもわれる広縁を四周にまわし、四方各正面に石階十級をとりつけていた。各方五間のうち中三間板唐戸、両脇一間連子窓となつていて、柱は角柱、抖拱は出組一手先で完全な和様であつた。中備は五間とも動植物を内側に彫刻した蓼股を用いるが、めずらしいのは蓼股と抖拱の上下に絵模様を、また貫と長押との間にも宝相華文を描き込んでいることで、本塔におけるひとつのアクセントとして注目されよう。垂木は上下層とも二重繁垂木で、尾垂木の各先端には上下あわせ計八個の風鐸がつられる。上層の組物は木太いみごとな四手先で、ほどよく表出されている饅頭形の上部には、立派な張出し勾欄が軸部を一周していて、東南西北の四ヶ所に入出口を設

けているのが望見できる。この大塔の下層内部には五智如来が安置されていたと『新編鎌倉志』にみえているが、分離のさい塔と共に破壊されたのか行方についての記録はない。なおベアトにはすぐあとで紹介するごとく図版七とは別に同じ八幡宮の多宝大塔写真が存していて、軽視しがたいひとつの問題点を投げかけることとなる。

図版七にはすでに記したごとく大塔と共に入母屋造り、裳階付きの重厚な薬師堂が、塔の左後方に写っているのがわかる。この薬師堂こそが明治維新まで「鶴岡山八幡宮寺」といわれていた同宮の本地仏を安置するもつとも重要ないわば本堂に相当する建物で、本地堂とも呼ばれていた。薬師堂の外観は多宝大塔や輪藏と同様に重層建築となっているが、これらはいずれも室内を広くするために裳階を付け、その裳階部分に屋根をのせたので、あたかも二重屋根の建物のごとき感を与えるのである。したがって元来薬師堂の場合は、身舎が正面三間、側面二間で、これに周囲各一間の裳階が付けられているために、外からみた薬師堂の柱間は正面五間、側面四間となり、境内絵図には薬師堂の実長を桁行七間四尺八寸、梁間六間二尺四寸と記すから、境内でもつとも大きな建造物であったことがわかる。同堂もやはり和様で下層裳階部は簡素な出組一手先。中備は撥形の間斗束。二重繁垂木で、外部正側面の柱間には出入口を除き腰板がはめられていたようにみえるから、吹放しの感がしたのではないかとおもわれる。上層部も二重繁垂木であったが、斜拱は重量感に富んだ四手先となっている。身舎内陣には本尊薬師如来坐像、脇侍日光・

月光両菩薩立像、左右六軀づつの十二神将立像が安置されていた。神仏分離でこの薬師堂もとりこわされることとなった際、安置諸像は近くの寿福寺へ移されたが、現在は東京都あきる野市普門院塔頭新開院の所蔵となっている^{註20}。これらの諸像につき三浦勝男氏は次のような報告をなされている^{註21}。

木造薬師三尊像は、造立年代はわからないが室町時代もしくは近世の所作にかかるものではないかといわれ、像の体内には木片の銘札とおもわれるものが入っている。これはとり出すことはできない。が、脇侍の日光・月光両像の台座底面に、元和五年（一六一九）の次の銘がよみとれる。像高、中尊八四cm、日光一〇三・五cm、月光一〇五・五cm。

奉 再 興

日光月光并十二神将

護持信心施主無病延命子孫繁昌^{昌カ}□^{昌カ}

施主

元和五^{己未}年七月十三日

伊藤右馬允政世

また、像高一m前後の十二神将像の各台座裏にも、殆んど同文の次の銘がある。

奉 再 興

日光月光并十二神将

右為護持信心施主無病延命子孫繁昌也

元和五^{己未}年七月十三日 施主 伊東右馬允政世

これによって明らかな通り、旧薬師堂の日光・月光・十二神将の諸像は、秀忠が八幡宮全体の造替を命じた元和八年（一六二二）に先立つ同五年の再興造立であつたことを知るわけだが、このへん施主の伊藤（東）右馬允政世のことともあわせ今後の究明が必要であらう。

以上の七枚が横浜開港資料館発行の『写真集』に掲載されている八幡宮の幕末古写真であるが、実はさきにも寸言したごとくベアトには、これ以外に八幡宮の多宝大塔を撮影した写真がもう一枚遺存する。項をあらためそれを紹介しよう。

四

図版八がすなわちベアト撮影の八幡宮多宝大塔の古写真である。これを所蔵するのは安城市本證寺林松院文庫で、写真の大きさはタテ二八・一センチ、ヨコ二三・六センチを計測するから、いわゆる四ツ切の左右を〇・八センチづつ、天地を一・一センチづつそれぞれ切断したものである。写真はモノクロームで現在はセピア色に変じているが、映像はきわめて鮮明で資料的価値が高いといわねばならない。写真はタテ四三・七センチ、ヨコ三〇・〇センチの画用紙風台紙に貼られており、その台紙は冊子になっていたものの一枚をはがしたような形跡がある。台紙には写真の下にフランス語で「Kanaku-ura—Temple du fond」とい

うキャプションがペン書きされているところより、この一枚を含むものアルバム一冊は、フランス人の所有だったことを推測せしめよう。

関口欣也氏著『鎌倉の古建築』によれば、これと同じ写真がイギリスのピーボディー・エセックス博物館にも蔵されていて、それに「F・ベアト撮影」と明記してある^註。しかしはたしてこれが真にベアトの撮影になるものかどうか疑問視するむきもあるかも知れないので、二、三の証拠をあげて、それがまちがいなきベアトの作品であることを証しておきたい。その第一の証拠は図版三でみた僧をはさんでの三人の人物が、図版八にも写っている事実である。すなわち図版三の中央の僧が、図版八の大塔石段むかつて左下に腰をおろす僧と同一人物であることは誰の目にも明らかであり、また腰をおろすその僧の横で左足を石段の地覆にのせて立つ男性が、図版八の塔中央縁板上に背をむけて立つ男性にそれの左にいるひとが、図版八の塔中央縁板上に背をむけて立つ男性にそれぞれ同じであろうことは、容貌ならびにその身形^{みなり}よりして疑いなく、この二枚は同じ日にベアトが撮影したものであることを何人も認めざるをえないであらう。第二の証拠は、図版ではすこしわかりにくいかも知れないけれども、塔の南側すなわち写真のむかつて右側に長身のひとりの外国人男性が、両手を腰にあて重厚雄大な多宝大塔を見上げているが、この外国人男性は顔いっぱいにひげをたくわえ、白のカッターシャツに黒のチョッキ、そしてズボンに革長靴という出立である。それは図版三の神楽所の石段に三人の外国人が座るうちのむかつて右端の男性と同じ

人物であり、かれは図版一、図版五にも登場する黒の帽子に黒のオーバー姿の外国人と同一人物であるにちがいない、この面からも図版八をベアトの撮影とすることに異論はないものとおもわれる。第三に指摘しておきたい点は、なによりもこの迫力ある大塔写真のカメラアングルが、他の追隨を許さないベアト独自のすぐれて抒情的なものとなっている事実であろう。『写真集』からも十分くみとれるごとくベアトの作品には、言葉や文字では表現しがたい通奏低音のような一種不思議な魅力があり、かれの撮影になる写真と直感的に判断できる何かがあるようにおもえてならず、図版八の多宝大塔などもまさにそうしたひとつにほかならないのである。

かくて図版八もこれまでにみてきたのと同様ベアトが写したものとすれば、注目されるのはすでに図版七でみた塔のむかつて左に薬師堂がみえること以外、塔手前右に仁王門、塔後方に鐘樓のそれぞれ屋根の一部が写っている事実である。仁王門は切妻造り和様の三間一戸八脚門で、垂木は二重繁垂木。境内絵図にその実寸を桁行四間二尺四寸、梁間二間二尺と記す。門扉の中央上方には、上宮樓門の寺額を書いたと同じ曼殊院入道二品親王良恕筆の「鶴岡山」なる山号額が掲げられていた^註。入口左右には阿吽の仁王像が置かれていたが、分離時これは寿福寺へ移され今も同寺に現存する^註。門のほうは横須賀市浦賀の某寺へ移築され、俗に「浦賀の赤門」と呼ばれて有名であつたらしいが^註、いまも現存するのかどうか未調である。

いっぽう多宝大塔の東側にあつた鐘樓は、境内絵図に桁行三間二尺、梁間二間七尺とあり、高い石垣積の基壇上に入母屋造り総計十二本柱の建物で、これに正和五年（一三一六）銘の径一〇六センチ、厚さ二〇・五センチというかなり大型の梵鐘がつられていた。黒川春村（一七九九—一八六六）旧蔵のその拓本が早稲田大学会津八一記念博物館に所蔵されており^註、金沢文庫にも拓本のひとつがあるとのことである^註。梵鐘研究の泰斗坪井良平氏（一八九七—一九八四）によれば、八幡宮の梵鐘は正和五年の作品そのものではなく、同年の原銘を入れた改鑄鐘であつたことを次のごとく指摘されている^註。

一二二七 鶴岡八幡宮鐘 相模

黒川春村旧蔵拓本。陰刻。拓紙（五七・六×六三・七）。

（第一区） 鶴岳八幡宮鐘銘并序

夫当宮者 馬台東成之州鶴岳甲区之地
摸男山之宗祧弘 尊廟之權屏以降礼
神之困頌祇之堂焉礼頌不儼春禴之奠
秋嘗之儀矣春秋幾廻鎮護年尚答睨日
新然間去茲迎姑洗不図欠靈祠肆深仰
玄鑒忽跂經始課般僎兮是尋是尺用規
矩兮不愆不忌土木之勤既雖及兩祀斧
斤之功殆可謂不日傍斯苦孺而複鴻基

先擊蒲牢而發。鯨音乃作銘曰

(第二区) 冶鑪甫就 宝器鑄陶 童文製妙

鳧巧奇標 形非侈掄 声不擻窕

應陰陽律 入宮商調 小大共振

清濁孔昭 帶霜早和 隨風自搖

式驚千界 高徹九霜 梵響無斷

軍三會朝

正和五年二月日

(銘文右肩の○は異体文字であらわされていることを示す。)

*神奈川県鎌倉市鶴岡八幡の鐘銘である。「新編鎌倉志」にはこの鐘の大きさを径三尺五寸、厚三寸五分ありと記し、銘文を掲げたうえ「鶴岡社務次第に、応永十三年七月十八日小町辺に火事出来、大風余煙鐘樓に吹付る刻、一心院の大工謀を致し、鐘樓に上り、彼の火を消、然して新に造訖、銘は正和年中の古本を写す、建長寺の広嚴庵大建書之とあり」と記している。銘文は正和五年の撰になるものであるが、上記の拓本は応永十三年以降の改鑄時に、建長寺広嚴庵大建の執筆にかかるものであることが知られる。この鐘銘の拓影も「集古十種」に見えるところである。

これに関し八幡宮の明治初年における神仏分離をまのあたりにした安政三年(一八五六)生まれの同宮門前宝戒寺住僧静川慈潤師の談話に「多宝塔の右少し斜に方り、鐘樓がありました。梵鐘は三代將軍家光の寄附せられた名器でありましたが、鉄槌で打々破壊せられた音響は、五十年後の今日、尚ほ拙僧の耳底に残って居る心地がいたします。古道具商が

買取って鑄つぶし、純金数斤を得たといふことであります。」とあるのを参照すれば^{註30}、八幡宮の梵鐘は正和五年(一一三一六)二月に最初のものが鑄造され、応永十三年(一四〇六)七月十八日の火事でそれが被災。おそらく梵鐘として鳴りが悪くなってしまったのであろう。その後江戸幕府初代將軍徳川家康の遺命をうけて、二代將軍秀忠による元和八年(一六二二)から三代將軍家光の寛永三年(一六二六)にいたる同宮の大々的な造替の一環として、建長寺広嚴庵大建の書になる正和五年撰の原銘をそのまま入れた改鑄鐘が造られたということになる。これが江戸時代二四〇年間にわたり、梵響断ゆること無く親しまれてきた名器であったのだが、ついにあの忌わしい神仏分離政策で、宝戒寺住職静川慈潤師の生々しい談話のごとく破壊されてしまったのである。

ところで、図版八は図版七と共にベアトが、同じ八幡宮の多宝大塔をほぼ同角度から撮影したものであるにもかかわらず、よく見くらべてみると顕著なちがいのある事実^{註31}に誰しも気付くであろう。いまそのへんのところを具体的に指摘すれば、まず第一に図版八は、塔の上層頂部に下より露盤、伏鉢、請花、擦、九輪、四葉、六葉、八葉の三花輪、宝珠で構成される堂々たる相輪がみられるのに、図版七にはそれが無い。また図版八は相輪の四葉から四隅にむかって宝鎖が垂れ、それをとりつける隅降棟も存するのに、図版七ではまったくそれが存しない。鎖といえは図版八の上層中央に、露盤の基礎より一本のそれがやだるみに添って降りているが、図版七では認めることができない。さらに図版八の塔の縁

かどには、積荷のような物体が置かれているのに図版七にはなく、逆に図版七では、石段の右に板戸状のものがたてかけてあり、塔の軒下あたりに屋根材の桁板らしき山積みが見られるなど、明らかに図版八とは様子が異なる。そして何より大きなちがいは、図版八では塔の手前に仁王門、うしろに鐘樓の屋根の一部が写っているのに、図版七にはそれがみえず、とくに仁王門は側石と礎石だけが残存するかのような感を与えていることである。

このように図版七と八では、同じベアトが同じ八幡宮の多宝大塔を撮影したものであるにもかかわらず、二枚の写真には相当顕著なちがいの事実が判明したわけだが、これはいうまでもなく図版七と図版八の撮影時期が、明瞭に異なることを意味する。かかる現象はすでにみた通り図版五、図版六の神楽所についてもいえるところであって、すくなくともベアトは二度にわたり八幡宮を撮影していたことは否定しがたい。問題はそれがいつであったかだが、ここであらためベアトの足跡を斎藤多喜夫氏がまとめられた年譜にみてみよう^註。ベアトが日本にやってきたのは、文久三年（一八六三）春ころで、翌元治元年（一八六四）十一月、かれはワグマンらと共に鎌倉へ撮影旅行に出かけているのがわかる。外国人が写っている図版一、三、五、八はそのときのものでみてよからうし、図版四も神楽所の縁上においてあるきやたつが図版五にあるのと同じで、かつきやたつの左つまり神楽所の南西角にズボン姿の外国人らしき人物がみえるところからも同時の撮影と判断できよう。他

F・ベアト年譜

西暦	和暦	事項
一八二五	文政8年	イタリアのヴェネチアに生まれる。程なくマルタ島に移り、兄アントニオとともに写真家への道を歩む
五〇	嘉永3年	この頃、妹マリアと結婚した写真家ロバートソンがコンスタンティノープルの帝国造幣局首席彫版師に任命されたのにもない、これに同行する
五五	安政2年	9月 ロバートソンとともにクリミア戦争に従軍
五六	" 3年	クリミア戦争に取材した写真の展覧会をロンドンで開き、成功を収める。この頃、イギリスに帰化。その後、ロバートソンとともに、アテネ、エジプトからバレスティナにかけて撮影旅行を行なう
五七	" 4年	カルカッタにスタジオを開いたロバートソンと兄アントニオに同行、インドに赴く
五八	" 5年	イギリス陸軍省の委嘱を受け、セボイの反乱を取材。報道写真家として注目される
六〇	万延元年	アロー号戦争に揺れる中国に赴き、北京へ向かう英仏連合軍に随行。この頃、絵入り『ロンドン・ニュース』の特派画家兼通信員ワグマンと知りあう
六三	文久3年	春頃来日。ワグマンとパートナーシップを結び、横浜居留地24番で「ベアト・アンド・ワグマン」というスタジオを開く
六四	元治元年	8月 英米仏蘭四国連合艦隊の下関砲撃に従軍
六七	慶応3年	11月 ワグマンらとともに鎌倉に撮影旅行。殺害される直前の二人の英軍士官と江ノ島で会う
六八	明治元年	オランダ公使ポルスブルックとともに富士山に登る
六九	" 2年	この頃、ワグマンとのパートナーシップを解消
七〇	" 4年	収集した写真をアルバムにまとめ、英軍兵站将校マレーの執筆になる解説シートを添えて売り出す
七二	" 6年	この頃、海岸通り17番に写真館を開く
七三	" 7年	アメリカの朝鮮遠征隊に従軍
八四	" 17年	1月 写真館のネガから顧客までそっくりスタイルフリード・アンド・アンデルセンに譲渡
八六	" 19年	11月29日 離日。イギリスのスーダン遠征隊に従軍
一九〇四	" 37年	イギリスに戻り、ロンドン地区写真協会で講演 この頃、ビルマのラングーンとマンダレーで家具工場を経営していた。没年は不詳

方図版二はどうかといえ、これも樓門むかつて右の回廊部屋から顔を出す僧が、図版三、図版八に写る僧と同じにみえることと、神仏分離で真先に破却される回廊東側の六角堂がまだ健在なことから、同じときに撮られた写真とみなしておきたい。

するとベアトが撮影した八幡宮の八枚の写真のうち、図版一・二・三・四・五・八の六枚までが元治元年十一月のものとなれば、残る図版六・七の二枚は、いったいつ撮られたかである。そのことを考えさせるに示唆的なのは、すでに指摘した図版五と六の神樂所、図版七と八の多宝大塔における写真内容の顕著なちがいである。とくに図版七の場合多宝大塔の相輪、宝鎖、降棟の欠失、および仁王門、鐘樓の消滅は、

御届書

鎌倉鶴岡八幡宮御社内在来之薬師堂、護摩堂、大塔、経蔵、鐘堂、仁王門、右混淆之佛堂取除キ、仁王門跡江、華表取建、内廓三面、塀垣別紙繪圓面之通修理仕候、此段御届申上候、以上、

鎌倉

鶴岡八幡宮一社惣代

明治三午年五月

總神主

宮崎 博尹 印

神奈川県

御役所

なる文書にもある通り、下宮に存在した仏教関係諸建造物が明治三年（一八七〇）にわずか十余日間でことごとく破壊されるという恐るべき状況ときわめてよく合致しているとみるのは、うがちすぎであろうか。このような事態を考慮に入れて図版六に望むと、図版五で確認できる神樂所正側面に掲げられていた扁額が取り除かれている理由も、それが仏教的内容であつたためと理解できるし、石段右の大きな礎石も、中央に穴があいているところから多宝大塔の心礎であつたという大胆な推測も可能となつてこよう。神仏分離政策が日本全土を怒濤のごとく襲つていたちようどそのころ、ベアトは横浜の海岸通り十七番に写真館を開設し、写真家としての地位を確乎不動のものとしていたことが、上の年譜より読みとれる。当時外国人には横浜居留地より十里四方は、パスポートなしで旅行ができる遊歩区域の制があり、馬で数時間の距離にある鎌倉もその中に入つていた。明治三年（一八七〇）ころにベアトが、再度鎌倉を訪ね神仏分離の暴挙をまのあたりにしたことは十分考えられるであろう。はたしてそうだとすれば図版六、七は、その最中の写真ということになり、まことに重要かつ興味あるものといわなければならない。

ところが、右のように考えた場合、ひとつ都合のわるい事実があることを開港資料館の斎藤氏よりご指摘いただいた。それは同館に所蔵されるベアトのアルバム五点（A〜Eの記号で分類）のうち『写真集』で、ID. "PHOTOGRAPHIC VIEWS、—ある外国人がバラで買い求めた写真を、自分でアルバムに貼り付けたものと思われる。一二一枚の風景・風

俗写真を含むが、原所有者がバミューダ島へ旅立つまでの前半の五四枚が、横浜でベアトから購入したものと推測される。」と解説されているDアルバムの随所に、「1864」というベアトが鎌倉を訪れた際の元治元年を示す西紀の書込みがみられ、そのDアルバムには図版二、四、五、七の八幡宮写真も含まれるから、図版七の多宝大塔のみを神仏分離による解体中の写真とみなすのは、いかなるものであるうか、という至極もつともなご指摘であつた。ただしDアルバムにおける四枚の八幡宮写真には、いずれも西紀の記載をみないが、ともかくこうなれば図版五、六の神楽所、図版七、八の多宝大塔についての違いは、別の解釈を試みる必要が生じてくる。たとえば台風被害などによる修理前の写真が図版六、図版七で、修理後のそれが図版五、図版八との見方も一案であろう。そういえば図版四の護摩堂には修理をおもわせる足場がかかっているし、古写真に写っている多くの建造物にはしごがかけられているのも、『写真集』では防火用とあるが、それだけではなく修理に係してのはしごかも知れない。

そこで中央气象台・海洋气象台編『日本の気象史料』にあたってみたところ、はたして元治元年八月八日（一八六四年九月八日）に強烈な台風が中心が横浜を通過している事実が判明した。すなわち

元治元年八月八日（一八六四年九月八日）

江戸 大風雨

鶴岡八幡宮の幕末古写真

武江年表 九日 夜前より雨 夜明より大風雨 南風扇き 後西
北風に替り 屋上塀牆大破に及ぶ所多し

日本貿易新聞 八日に烈しき旋風起り横濱者其中心に當れり 八
日の夜中頃より南東の風烈しくなり翌朝に至りて益々
烈しく九日の朝十一時頃迄強く暴れたりしが、此とき
に至りて急に歇みて一時の間静謐なりしが風急に北西
に變り暫時の間雨なく 實に驚くべき暴風となりて漸
く日暮に至りて全く歇みたり 此とき晴雨儀者 如何
程下りたるや知らずと雖も港内にある船 皆蒸氣を燒
き出す程なれば極めて餘程下りたるべし 港内に在る
船にて損害なしと雖も ポンド及び波止場者大なる害
を蒙り小船は海岸へ打上られたり 朝第九時より第十
一時の間の勢最烈しき時輕き地震ありて暫時の間に歇
みたり

（参 考）

（八日、西曆ニテ示セルモノニシテ九月八日ナリ）

中山忠能日記 八日 晴陰已半過雨 終日雨折々止又降入夜止
亥半過又下 丑半計已後烈風雨止

九日 晴陰不定風烈 已朝風止同半過細雨後晴陰小雨
不定申剋晴又風 今朝井水濁如何奇

高田市史 九日大雨 正午十二時に至り 關 矢代諸川汎濫 表

川原町邊道路上二尺に及ぶ

とあるのがそれを示す史料であるが、ベアトが鎌倉を訪れるのは、これより二ヶ月半後の鎌倉事件が起きる十月二十三日（一八六四年十一月十一日）のことであったから、図版六の神樂所、図版七の多宝大塔は、台風被災後の写真とみれなくはない。そうとすれば残りの図版六枚の撮影をいつとみるかだが、その際Dアルバムの「1864」を無視できないとなれば、必然的に元治元年中ということになろう。問題はそれが図版六・七の前か後かで、もし前とすればベアトは同年八月にイギリス・アメリカ・フランス・オランダ四国連合艦隊の下関砲撃に報道写真家として従軍しているから、それより以前の可能性が考えられる。逆に後とみれば年内はわずか一ヶ月ほどしかなく、その間に護摩堂を除く諸堂の修理復興が完了していたとしなければならず、時間的にやや無理な面がある。特に図版一における銀杏の繁茂状況を考慮するならば、なおさらその感を深くせざるをえないので、結局ベアトは元治元年八月の下関砲撃までにいちど鎌倉を訪れ、図版一・二・三・四・五・八を、そして九月の台風後、十一月に再度鎌倉旅行を企てたとき図版六、七を撮影したとみるのが、もっとも無難妥当な見方ではないかと考える。

ただその場合やはり気がかりとなるのは、図版七に仁王門と鐘楼がみえない事実であろう。両建造物が明治三年の神仏分離で撤去される以前に、元治元年の台風で倒れ、それを再建したという記録がないだけにな

おさらその感を深くせざるえないのである。このへん今後もっと究明する必要性のあることをあらため指摘しておき、今は図版五・六、図版七・八の違いをいちおう上記のごとくみておくこととしたい。

以上、イタリア生まれのイギリス人写真家フェリックス・ベアトが、元治元年に撮影した鎌倉鶴岡八幡宮の幕末古写真をめぐり、ほしいままな考察をめぐらしてきたが、いずれにしてもかれが残してくれたこれら八枚の古写真は、何度も記す通り神仏分離以前の八幡宮の姿を如実に伝える点で貴重この上なく、ことに横浜開港資料館の『F・ベアト幕末日本写真集』にも入っていない多宝大塔の鮮明な写真のあらたな紹介は、いまさらながら明治になってからの同塔の湮滅が惜しまれてならないだけに、その意義は決して低くはなからうとおもうものである。

末尾ながら本稿を成すにあたり、図版写真の掲載を許可された鶴岡八幡宮および横浜開港資料館、そして懇篤なるご垂示をたまわった開港資料館の斎藤多喜夫氏、京都大学の根立研介氏に対し深甚の謝意を表し摺筆する。

註

- 1 鶴岡八幡宮については左書が詳しい。
貫達人著『鶴岡八幡宮寺—鎌倉の廃寺—』有隣新書五四 一九九六年一〇月第一刷・二〇〇三年七月第二刷 有隣堂。
- 2 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史 社寺編』一九五九年一〇月初版・一九七二年一〇月三版 吉川弘文館 六九七〇ページ。

- 3 国立歴史民俗博物館情報資料研究部編『社寺境内図資料集成』東北・関東・中部・中国・四国・九州 国立歴史民俗博物館資料調査報告書二〇〇一年三月 国立歴史民俗博物館 二〇八ページ。
- 4 関口欣也著『鎌倉の古建築』有隣新書五五 一九九七年七月 有隣堂 一三五～一三七ページ。
- 5 ベアトの行実左の解説にもとずき記述した。謝意を表したい。
斎藤多喜夫「解説F・ベアト 人物と写真の魅力」(『別冊歴史読本』一二一五) (古写真にみる幕末・明治 今、蘇る激動の時代の決定的瞬間) 一九八七年七月 新人物往来社 一七〇～一七三ページ。
- 6 横浜開港資料館編『F・ベアト幕末日本写真集』一九八七年二月第一刷 二〇〇一年八月第五刷 横浜開港資料館。
- 7 『写真集』と本誌掲載図版番号の関係は表の通りである。なお下のA、Eは横浜開港資料館所蔵のベアト関係アルバム記号で、○はそれらのアルバムに番号の写真が貼付されていることを示す。

図版番号	写真集の頁と番号	A	B	C	D	E
一	47	○	○			○
二	48	○	○		○	
三	51	○	○			○
四	50				○	
五	46	○	○		○	
六	50			○		
七	49	45	46	○	○	○
八	図版八は安城市・本證寺林松院文庫の所蔵写真で、これと同じものがイギリスのピーボデイ・エセックス博物館にもある。					

8 明治初年の神仏分離政策によってこの額は現存しないが、額草が残る。現在の額は単に「八幡宮」となっており、「寺」の字を欠く新しいものである。註1の三ページ。

- 9 白石克編『新編鎌倉志(貞享二刊) 影印・解説・索引』二〇〇三年二月汲古書院三二二ページ。
- 10 辻善之助・村上專精・鷲尾順敬編『新編明治維新神仏分離資料』三一関東編(2) 一九八三年七月第一刷 二〇〇一年八月第二刷 名著出版 五四二ページ。
- 11 なお初版本『明治維新神仏分離史料』全五巻は、一九二六年から一九二九年にかけて東方書院より刊行された。
- 12 註8の『新編鎌倉志』三五ページ。
- 13 註9に同じ。
- 14 註9の四七五ページ、五四四ページ。
- 15 三浦勝男「鶴岡八幡宮と神仏分離(二) 社蔵宝物等の移動について」『三浦古文化』四 一九六八年五月。
- 16 同右「鶴岡八幡宮と神仏分離(二) 社蔵宝物等の移動について」『三浦古文化』七 一九七〇年三月。
- 17 清水真澄「五島美術館の愛染明王像」『三浦古文化』一二 一九七二年九月。この論文はのち左書に所収。
- 18 清水真澄著『中世彫刻史の研究』一九八八年三月 有隣堂 二三〇～二四〇ページ。
- 19 三浦勝男「明治維新Ⅱ神仏分離令の発令―鶴岡八幡宮の神式化―」『国文学解釈と鑑賞』別冊―貫達人・三山進編『鎌倉のすべて』所収 一九八六年一〇月 至文堂 一二一～一二八ページ。
- 20 根立研介著『愛染明王』(『日本の美術』三六七) 一九九七年九月 至文堂 六ページ 四一ページ。
- 21 註9の四七一ページ、四七五ページ。註12の三浦論文(二)五五ページ。文化庁監修『重要文化財』二―書跡・典籍・古文書Ⅳ 仏典Ⅱ―一九七七年一月 毎日新聞社 一一八ページ。
- 22 註9の五四二ページ。註12三浦論文(二)五五ページ。
- 23 鶴岡八幡宮社務所『鶴岡八幡宮年表』一九九六年六月 続群書類従完成会 四六六ページ。
- 24 もっとも貫達人氏は註1の著書一七七ページに図版七と同じ写真を掲げて、多宝大塔と薬師堂は江戸幕府第十一代將軍徳川家斉(一七七三―一

八四二)が、文政十一年(一八二八)に再建したものと記しておられる。しかし註4の関口欣也氏はその著一八七ページで、下宮の仏教関係諸堂は第二代將軍徳川秀忠(一五七九—一六二二)による寛永元年(一六二四)から同五年(一六二八)の造替と考えられる旨の記述をされている。本論では関口説を採用したが、なお検討を要しよう。

中西亨著『日本塔総監』一九七八年一〇月 同朋舎 四一三—四一四ページ。

18 同右一二三ページ、一二八ページ。

なお同右二二五ページにも記されている通り、徳島県市場町切幡寺にも元和二年(一六一六)徳川秀忠建立の旧摂津住吉社西大塔が移築されていて重文の指定をうけるが、これは同じく方五間でありながら、そのつくりが明らかに多宝大塔とは異なり、天台系の二重方形大塔である。

国立歴史民俗博物館編『なにが分かるか、杜寺境内図』二〇〇一年一〇月 財団法人歴史民俗博物館振興会 二三ページ。一一六ページ。

註1の二一六ページ。註9の四七五ページ、五四四ページ。

註12の三浦論文(一)五七ページ、六七ページ。六八ページ。

林松院文庫へこれが入ったのは、平成十五年(二〇〇三)六月のことである。

註4の一八八ページ。

註8の『新編鎌倉志』三二ページ。

註9の四七二ページ、五四四ページ。註12の三浦論文(一)六六ページ。

註9の五四三ページ。

真鍋孝志編『梵鐘』九一特集 黒川春村旧蔵逸亡鐘銘拓本 一九九八年一〇月 古鐘研究会一〇—一一ページ 四七—四八ページ。

註12の三浦論文(一)五六ページ。

坪井良平著『日本古鐘銘集成』一九七二年三月 角川書店 一四二—一四三ページ。

註9の四七一ページ。

註5の一七三ページ。

註9の五四三ページ。

註5の一七一ページ。

34 Dアルバムに「88」の書込みがみられる写真を『写真集』の番号で示すと、5・6・157・158・160・161・166・167・168・170・171・176・184・187・188・189・191・215・232・233・236の二枚で、Dアルバムに貼られるベアトの作品五四枚の半分近くを占める。この「188」というのは、撮影の時期か、写真を入手したときか、書込みをした年か判断としないが、原所有者は一八六四年中に横浜でベアトから写真を入手し、その後バミューダ島へ移動したと考えるのが自然であると斎藤氏はいわれる。

35 中央気象台・海洋気象台編『日本の気象史料』一九七六年六月第一刷、一九七七年第二刷 原書房 二四九ページ。

(補記)

鶴岡八幡宮旧蔵の愛染明王坐像につき、京都大学の根立研介氏より『明治維新神仏分離史料』の口絵写真と五島美術館蔵のそれとが一見別像のようにみえるのは、やはり本文中でも筆者がふれた通り、美術館で後補の彩色を除去し古仕上げ修理を行なった結果であって、本像特有の脛部をわたる腰布端の波状の布線や台座、光背の形状が一致するところより同一像とわかり、写真の角度やレンズの違いが起因して異像の感を与えたとのご教示をいただいた。ここに補記して根立氏に深甚の謝意を表しておく。

(補記Ⅱ)

ベアトについては最近つぎのようなことどもが明らかにされたので補記しておきたい。まず生年は従来いわれていた一八二五年(文政八)ではなく一八三四年(天保五)であった。したがって最後の事跡が知られる明治三十七年(一九〇四)は七十歳であったということになる。またベアトの父の名もダヴィデ・ベアトと判明し、かれの生まれ故郷はギリシャ西方のイオニア海に浮ぶ当時イギリス領のコルフ島とわかったから、ベアトは生まれながらにしてイギリス国籍をもつ元ヴェネツィア領民だったのである。そしてフェリックス(Felix)という名は実は俗称で、フェリーチェ(Felice)が正式のファースト・ネームであったことも明らかにされた。詳しくは左書を参照されたい。

斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』歴史文化ライブラリー一七五 二〇〇四年四月 吉川弘文館 五六—一〇五ページ。